

令和 7 年度

入学試験問題（中 学 校）

B 日 程

国 語

※解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

次の【文章1】【文章2】を読んで、下の問いに答えなさい。

【文章1】

現在の社会は次々と新しい機械を作り、便利にしようとしていますね。（1）便利とはどのようなことを言うのか考えてみると、次の三つが浮かび上がります。

- ① 効率よくできる
- ② 手がかからない
- ③ 思い通りになる

これを実際に考えてみる身近なよい例が「炊飯器」です。ほとんどの家で使っていますね。いとお米と適量の水を入れてスイッチを押せば、まったく手をかけずにおいしいご飯がで上がります。出かける時に炊き上がってほしい時間を予約しておけば、留守の間にちゃんとほらいてくれます。私が子どもの頃は炊飯器はありませんでした。お釜を火にかけて、火加減を自分で調節しながら炊くのですから、母は出来上がるまでずっと側にいなければなりません。それより少し前は、かまどに火を起し、薪をくべて炊いていたのです。とても手間がかかるうえに、慣れた人でなければ火加減が難しく、少し生になったり、お焦げがたくさんできたり……大変でした。炊飯器は失敗なしです。手をかけなくてもおいしくできるのでから便利です。このほかにも、掃除機や洗濯機など多くの家電製品が、女性が外で働くことを助けてくれています。

便利な道具は本当にありがたいです。ところで、ここで生きもののことを考えてみましょう。（2）、効率がよい、手がかからない、思い通りという便利を表す言葉のどれもが、生きものとは合わないことに気づきます。

まず「効率」です。あなたの家とお隣の家で同じ時に赤ちゃんが生まれたとします。どちらも一年かけて一歳、二年かけて二歳と育っていきます。どちらかが突然大人になるということはありせん。車をつくる工場が二つ並んでいる場合を考えると、隣の工場より早く製品を仕上げられるように努力して、効率よく生産することができすし、実際に早さの競争に勝った工場が高く評価されますね。そちらの方がお金も儲かります。

生きものはそうはいきません。一歳は一歳として大事、二歳は二歳として大事なのであり、それを飛ばしては生きていくことになりません。車などの機械は出来上がり、つまり結果で評価されるけれど、人間、つまり生きものにとって大事なのは過程（プロセス）なのです。生きるということは時間を紡ぐことであり、その過程の一つ一つに意味があるのであって、先を急いでは本当に生きていくことにはなりません。効率のよい機械を作り、便利にすることが日常の助けになるからといって、人間まで常に「早く、早く」とせかされる社会になると、とても生きづ

問一 空欄（1）（4）に入る言葉として最も
適当なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

- ア なぜなら
- イ ところで
- ウ つまり
- エ でも
- オ すると

問二 部①のように、筆者が言うのはなぜですか。
説明しなさい。

らくなります。今の社会はその方向に行ってはいないでしょうか。

次の「手がかからない」というところを見ましょう。スイッチ一つで動く機械が、ご飯を炊いたり部屋の掃除をしてくれたりするのはありがたいことです。では、生きものの場合もなるべく手がかからないのがよいことなのかどうか。考えてみましょう。赤ちゃんのいるお母さんは大変ですね。夜中に泣いたら起きておっぱいをあげたり、おむつを換えたり……眠いのを我慢してけんめいです。ペットがいる人はその世話がなかなか大変でしょう。動物だけでなく庭の草花も手入れが必要ですね。生きものとは手のかかるものなのです。でも、ちょっと考えてみて下さい。ペットは世話をするのが楽しくて一緒にいるのではありませんか。お母さんは泣いている赤ちゃんを可愛いと思っており、いやいやあやしているのではありません。このようにして手をかける／かけられることから生まれる豊かな関係が、生きものにとってはとても大事なことです。そこではたらくのがこころであり、愛情です。この関係がうまく行かず、憎しみが生まれることもあるのが難しいところであり、生きることの大変さですが、そこを乗り越えて生きていくところに生き甲斐が生まれます。生きものとしてもっとも大事なのがこころ豊かな関わりですので、そこに面倒があるとしても、手抜きがよいという答えは出ません。機械が優先する社会では、関わりがうまく生まれなくなる危うさがあります。

三番目は「思い通りになる」でした。ね。薪を燃やしてご飯を炊いていた頃は、うっかりするとお焦げがたくさんできてしまうこともありました。炊飯器のふたを開ければ思い通りのふくらみご飯ができていたのがあたりまえなのは、とてもありがたいことです。思い通りに働かない機械など存在しては困ります。自動車はブレーキを踏めば止まる。思い通りですね。そうでなかったら危険です。でも生きものはもちろん、自然は決して思い通りにはなりません。久しぶりに友だちと遊園地へ行こうと決めた日に雨が降ること、よくありますね。私が忘れられないのは、2011年3月11日の東日本大震災で東京電力福島第一原子力発電所の事故が起きた時に、多くの人が「想定外」と言ったことです。日本列島は地震が起きる構造になっていますし、いつ、どこで、どのような形でそれに出会うかはわかりません。自然界で生きるからには、思いがけないことはあるものと覚悟し、それに備えていなければなりません。機械に囲まれて過ごし、いつもなんでも思い通りになるものと思っていると、自分の想定の中でだけ物事を考えるようになり、自然とつき合うのが難しくなります。それに、思い通りにならないのは悪いときめられるのでしょうか。思いがけずすばらしいことができることもありますね。思いがけず優しくしてもらってうれしかったこともあるでしょう。

便利がよい。(3) 効率がよく、手が抜けて、思い通りになることだけを求めていると、自然、とくに生きものとは離れていきます。農業は本来、面倒な自然を相手にするものですから、思い通りにはいきません。私たち人間は生きものですから、食べものは必要不可欠なのに、日本は自分で生きもの相手の農業を行うより、効率のよい工業を進めてそれによって得たお金で食べものを外国から買う方がよいのではないかと考え、その道を選択し、

問三 部②の指示する内容を説明しなさい。

問四 部③のようになる理由の説明として最も適当なものを選択し、記号で答えなさい。

ア 自然が思い通りにならなかったら、人間が決めたことも実行しづらくなり、とても不便になってしまうから。

イ 本来思い通りにならない自然を、人間が想定可能に思い通りになるものだと思ひ込んでしまうから。

ウ 人間は自分に想定できる範囲の中でしか活動できないので、想定外の事態が起こればあわてふためいてしまうから。

エ 日本は自然災害がいつ起こるか分からない国なので、常に災害に対しての備えをおこなうことができるから。

食糧自給率が低くなりました。機械論に基づく科学技術の振興を国策として工業化を進めました。本当にそれでよいのでしょうか。地球上の人口が増大し、食糧不足になるとも言われています。自分たちの食べものは自分たちで作らなければ危ないのではないか。あなた自身の問題として考えてみてください。

問題はそれだけではありません。便利だけを追求し、効率を求め、手を抜き、思い通りになることをよしとする考え方は、私たち人間に対しても同じことを求めます。先日お会いした保育園の先生の多くは、子どもたちに「早く早く」と言わなければならない毎日に疑問を持っていると悩みを語ってくれました。(4) なかに「早く早く」と言わなければこれから先の学校生活で困るからそう言わなければならないという考えをもつ先生もいらつしやいました。あなたは早く早くと追い立てられるのはどうですか。なんだか今の社会は忙しすぎると感じてはいませんか。忙しいという字は、分解すると心を亡くすとなりますね。あまり忙しいと、まわりの人に心配りする余裕がなくなります。ちよつと心配です。スマホがあるからお友達との話し合いがいつでもできて便利だけれど、でも新型コロナウイルスのパンデミックになり対面で会えなくなってみると、実際に会って話し合うことの大切さがわかったのではないのでしょうか。

便利になることをすべて否定はしませんが、人間は生きものというところから考えると、必要な機械は活用しながらも、人間も含めて生きものに関わる場所は「便利」という言葉にちよつと「？」をつけて、これでよいかなと考える必要があると思うのです。人間は機械じゃないんだと思っていることが大事ではないでしょうか。

(中村桂子「科学はこのままでいいのかな」による)

【文章2】

きみはいつか死ぬ。どんなに長く生きたいと思っても、誰にも等しく、死はやってくる。
要するに、きみの体はきみの思い通りにはならないんだ。

きみは、体という「自分では思い通りにならないもの」をかかえて生きている。

不安になってしまったかな？

絶望してしまったかな？

それともとくに絶望していたかな？

大丈夫。

「思い通りにならないこと」をネガティブにとらえる必要はない。

「思い通りにならないこと」は、きみが思うよりもずっとおもしろいことだ。

もちろんつらいと感じることもあるだろう。

体なんて牢獄だ、と逃げ出したくなることもあるかもしれない。

問五 部④のような考えと明らかに合わない考えを次から選び、記号で答えなさい。

ア 便利さを追求し、効率を求めようという考え。
イ 忙しい社会に対応していこうという考え。
ウ スマホがあるといつでも話し合えるという考え。
エ 自然は思い通りにはいかないという考え。

問六 部⑤のような筆者の「人間」に対する考えに合わないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 一つ一つの時間を積み重ねて成長していくもの。
イ 手のかかる関係のなかに愛情をはぐくむもの。
ウ 面倒な自然と上手に付き合って生きていくもの。
エ 忙しさをうまくやりくりして対処するもの。

問七 部のような筆者の主張に関して、授業で【文章1】を読んだTさんは、「思い通りにならないのは悪いときめられ」ない根拠に関連した【文章2】を探し当て、級友のKさん、Oさんと三人で話し合った。これを読んで後の設問に答えなさい。

でも、そこにはきつと宝石のような発見がある。

なぜなら、「思い通りにならないこと」は、「思いがけないこと」でもあるのだから。

逆の世界を考えてみよう。すべてが思い通りになる世界だ。

じゃんけんをしたら必ず勝つ。

外を歩くだけで、好みの人がどんどん声をかけてくる。

いくらでも食べたいものを食べられる。

いわば全能、神の視点だ。

でもそれって、そんなに楽しいことだろうか。

そんなに幸せなことだろうか。

そこには「うまくいくかな?」というスリルもないし、偶然の出会いもないし、その先にあるときめきもない。

だって、最初からそうなると分かっているから。

台本に書かれたとおりにしか、ものごとが進まないから。

思い通りになることは、案外つまらない。

プログラムされたとおりにしか動かないロボットと同じだ。

生きているという感じはしないだろう。

そもそも、人が頭で考えて思いつく「こうありたい」と願う内容なんて、大したことない。

これに対して、思い通りにならないことは冒険だ。

思い通りにならないことは、きみを想定外のところへ連れ出す。

(伊藤亜紗「きみの体は何者か」による)

【話し合い】

Tさん——【文章1】で、「思い通りにならない」ことを「思いがけず」もたらされるすばらしいことや優しさと結びつけていることについて、二人はどう思う?

Kさん——筆者の言いたいことはわからなくはないけど、もうちょっと説明があった方がわかりやすいかな。

Tさん——自分は【文章2】にある、「思い通りにならないこと」は、「思いがけないこと」でもある」という内容をはさむとスッキリ納得できたんだ。

Oさん——たしかに、「うまくいくかな?」というスリル「偶然の出会いやときめき」生きているという感じ」という【文章2】にある内容は、【文章1】が言う「思い通りにならないのは悪いときめられ」ない根拠になっているね。

Kさん——【文章1】では、(X)というところにまでふれていて、これが一番言いたいことなのかなと思う。

設問 空欄(X)に入る最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「思い通りにならない」ことがむしろ人間を含む生きものにとって当たり前だ

イ 「思い通りにならない」農業より、効率のよい工業を進めるのがよい

ウ 「思い通りにならない」結果、地球上の人口が増大し食糧不足になった

エ 「思い通りにならない」パンデミックによって、実際に会うことの大切さがわかった

二

次の文章を読んで、下の問いに答えなさい。

「焼き鳥盛り合わせと揚げ出し豆腐とだし巻き卵とタコの中から揚げ、あとビール。ぼくはウーロン茶で」

小さな居酒屋のカウンター席に大竹さんと並んだぼくは、適当に注文をした。

「ウーロン茶？」

「ええ、ぼく十九歳なんで」

「そっか。未成年か」

「大竹さんと二十も年が違うんですね。息子でもおかしくない年齢です」

「げげマジかよ」

そんなことを言っているうちに、すぐに飲み物がやってきた。

「仕事の後の一杯って、ウーロン茶でもいいですよ。それじゃ、お疲れ様です」

ぼくが乾杯をしようとコップを掲げたのに、大竹さんは人と飲んだことがないのか、目の前に置かれたビールをそのままぐびぐびと飲んだ。そして、次はやってきた食べ物を取り分ける間もなく、黙々と食べ始めている。飲みに行くって、まさかただ飲んで食べるってことじゃないよな。そう思いながらも、ぼくはだし巻き卵を一口食べてから、

「大竹さんの店、バイトしかないから、仕事帰りに飲みに行くってなかなかないんじゃないですか？」と口火を切った。

「だな。仕事終わるのも遅えし、帰りに食べに行くなんて初めてだ」

「大竹さんは帰ったら、すぐ寝るんですか？」

「そう。風呂も入らず、即寝る。もうぐったりだから。お前もだろ？」

「そうです。心身ともにハードな仕事なんで」
ぼくが冗談めかして言うのに、

「だよな」

と大竹さんはうなずいた。

昨日、誕生会の時にも気づいたが、大竹さんは自分のテリトリー以外では、少々弱気になってくれる。店から出れば、ほんのわずかだが、話しやすかった。大竹さん自身も店長という肩書きがとれると、気が楽になるのかもしれない。

最近話題のニュースのことや、店の売れ行きのことなど。そんなたわいもない話題に、^a ぼくの口数の三分の一ほどではあったけど、大竹さんは言葉を繋いでくれた。食事也大竹さんのお酒も進み、いくつか話をしたあと、ぼく

問一 部 a・b の語句の意味として最も適当なものを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

a たわいもない

ア 気になっている イ 思いやりがいい

ウ 安心できない エ 問題にもならない

b そりが合わない

ア 簡単に謝らない

イ 性格や考え方が一致しない

ウ 気軽に話ができない

エ 忙しくて会う機会がない

はずつと不思議だったことを思い切って尋ねてみた。

「一度聞いてみたかったですけど、大竹さん、どうして、オムライス屋さんをしようと思ったんですか？」

大竹さんは料理は上手だけど、オムライスのイメージとは程遠い。がっちりした体や鋭い目つきは、日本料理やラーメンといった雰囲気、オムライスではちよつと可愛らしすぎる。

「ばあちゃんの、得意料理だったからさ」

大竹さんはぼそりと言った。

「大竹さんのおばあさんの？ 大竹さん、おばあちゃんっ子だったんですね」

「まあな。俺、三人兄弟の末っ子でさ。親は共働きだったから、子どものころ、ばあちゃんの家で過ごすことが多かったんだ。兄貴たちは家で留守番してたけど、俺はばあちゃんの家が好きでさ」

「まだまだかわいいころですね」

「そう。で、ばあちゃんが俺に食べさせるためにオムライス作ってくれてさ。子どもの好きそうな食べ物ってそれくらいしか浮かばなかったんだろうよ。よく卵にケチャップで絵を描いてくれたんだよな」

大竹さんはそう言うと、四杯目のビールを頼んだ。顔は赤くなっている。

「いいですね」

おばあさんがケチャップで絵を描いている様子を思い浮かべると、温かい心地がする。

「ああ。ばあちゃんは、じいちゃんを早くに亡くして一人だったから、俺が来るのがうれしくてたまらなかったみたいでさ。それが子どもの俺にもバレバレなの。俺がおいしいって言ったもんだから、オムライスばっか作って。飽きたって言えず毎日のように食ったな」

「なんとなくその光景、目に浮かびます」

「だろ？ 居心地いいから中学生になっても、ばあちゃんの家に入り浸ってた。きっと、親よりもばあちゃんと過ごした時間のほうが長いぜ」

大竹さんは懐かしそうに目を細めた。その顔を見るだけで、どれだけいい時間を過ごしていたのが、おばあさんがどれだけ温かな人だったのが、よくわかる。大竹さんのおばあさんみたいになんでも受け入れてくれる家族がいたら、どれだけいいだろう。

「うちは祖父母が遠くに住んでて会うこともめったにないから、うらやましいです」

「でもさ、ばあちゃん子になりすぎたせいで、親は俺のこと扱いにくそうだったな。特に母親はもう一人で留守番できるんだからとか言って、ばあちゃんの家に行くのをあんまりいい顔しなかった」

「それだけ大竹さんとおばあさんの仲が良かったんですね。でも不思議ですね。おばあさんに大事に育てられたのに……」

問二 (Y) (Z) にあてはまるものとして最も

適当なものを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ選択肢を選べないものとします。

ア 手をたたいて笑った
イ ばかにして笑った
ウ にやりと笑った
エ 苦笑いを浮かべた

ぼくは失礼なことを言いそうになって、途中で口を閉じた。

「な。愛情受けてたのに、どうしてこんなに性格がひんまがつてるんだって、誰でも思うよな」

大竹さんは気を悪くはしなかったようで、（Y）。お酒の力ってありがたい。ぼくはえへへと笑った。

「ばあちゃんさ、俺のこと一番大事にしてんだ」

「そうみたいです」

おばあさんにとって大竹さんが何より大切だったこと。大竹さんもそれを受け止めていたこと。それは、話を聞くだけでわかった。

「それなのにさ、七十歳を過ぎたところから、ばあちゃん認知症になっちまって……。俺が中学二年生のころかな」

大竹さんはビールを飲みほすと、次にハイボールを注文した。

「そうなんです……」

「それがひでえ話でさ。ばあちゃん、俺のことだけをきれいさっぱり忘れやがったんだ。名前も顔も全部。全然寄りつかなかった兄貴たちのことは時々思い出して、名前呼んだり会えると喜んだりするのに、何度説明しても、俺のことだけ思い出さねえの。しばらくして、ばあちゃん施設に入ったんだけど、俺が会いに行っても、どちら様って無視だぜ、無視」

大竹さんは笑い話のように軽く話したけど、ぼくは胸の奥がきゅつとつかまれるような気がした。

「毎日のように俺、施設に行ったけど、ばあちゃん、死ぬまで一度も俺のこと思い出さないうままだったな。マジでたった一度も」

大竹さんは渡されたばかりのハイボールをぐくりと飲んだ。心を読まなくなっちゃって、大竹さんは話してくれていい。それなのに、返すべき言葉は見当たらず、ぼくは「そうだったんですね」としか言えなかった。

「ばあちゃんが死んでから、親ともそりが合わないまま居場所もない感じでさ。それで、ただの軟弱ヤンキーになったってわけ。俺なんて威張っていい気になつてただだよな」

大竹さんは（Z）。

大竹さんが威張っていい気になっているのは正解だ。どんな過去があっても、大竹さんの態度や口の悪さを、肯定はできない。でも、その背後にあるものを知ると、知らないのでは、ぜんぜん違う。

「確かに、大竹さん、威張ってますよね。おかげで、バイトが一週間以上続かないですもんね」

「そうそう。お前、すごいな。新記録達成者だ。ギネスに連絡しねえとな」

大竹さんはそう笑った。ぼくも笑いながら話を続けた。

「ぼく、最初に大竹さんの店で働いた翌日、驚いたことがあります」

「何だ？」

問三 部①「ずっと不思議だった」、部②「不思議です」について、どのようなことが「不思議」

だというのですか。それぞれわかりやすく説明しなさい。ただし、①、②とも「〱のに、……ということ。」

という解答欄の形式に従って説明すること。

問四 部③とはどういうことですか。最も適当なものを、次から選び、記号で答えなさい。

ア 大竹さんには、子どもの頃、かわいがってくれていたおばあちゃんが認知症になり、大竹さんのことを全く思い出してもらえないまま亡くなってしまったという悲しい過去があるということ。

イ 大竹さんには、子どもの頃、誰からもかわいがってもらえず、ずっとさみしい思いをしてきて、独りぼっちだったという思いを感じていたという悲しい過去があるということ。

ウ 大竹さんには、「軟弱ヤンキー」だったころがあり、犯罪に手をそめてしまったという罪の意識から、何とか社会に貢献したいという思いで努力を続けてきたという悲しい過去があるということ。

エ 大竹さんには、子どもの頃から、人と接することが苦手だという意識があり、誰と接する時もうまくいかず、多くの従業員たちをやめさせてしまったという悲しい過去があるということ。

大竹さんには、子どもの頃から、人と接することが苦手だという意識があり、誰と接する時もうまくいかず、多くの従業員たちをやめさせてしまったという悲しい過去があるということ。

「店がきれいになったことです。ぼくが行き届かなかったところ、大竹さん、朝からやり直してくれたんですね」
「いや、どうだろう」

「今でも毎日、店はきれいです。ぼくや常盤さん^{注1}ではできないくらいに」

軟弱ヤンキーだった大竹さんが料理を覚え、店を持てるようになるまでの努力は相当なものだったはずだ。自分のためだけでなく、そこにおばあさんへの思いがあるから、やってこられたにちがいない。それを守りたいという気持ちは、磨かれた調理場を見ればわかる。

「お前って、変なことに気づくよな」

「そうですか？」

「俺なんかのこと、気味悪いほどよく見てるわ」

「そんなの、ぼくだけじゃないですよ。大竹さんの誕生日プレゼント、常盤さんが選んでくれたんですけど、大竹さん世話好きだから植物にしたって言ってました」

「あの女もどこかおかしいよな」

「おかしくないです。大竹さん、おばあさんと一緒に世話好きなんですよ。毎日^{注2}まかないに大竹さんの作ったオムライスかピラフ食べてますけど、飽きたことがないです。微妙に味に変化つけてくれますもんね」

「やめろよな。お前、かなり気味悪いわ」

大竹さんは酔いが回ってきたのか、声を出して笑った。いつも暴言を吐いてくる相手であっても、笑ってくれるとうれしくなる。

「きつと、おばあさん、思い残すこと一つもなく大竹さんに愛情を注いだんだと思います。心残りがなくくらいに大事にできたんだと。だから、大竹さんのこと、きれいに忘れられたんじゃないでしょうか。不確かな頭で記憶を探ってわざわざ思い出す必要がないほど。そんなにも、誰かを愛しきれたってすごいと思います」

ぼくがそう言うのを、酔って赤くなった目で大竹さんはぼんやり聞いていた。

「そうかな。そうだいいけど」

「そうですよ。それ以外に大竹さんのことを忘れる理由^④、ありますか？」

「そうだな」

大竹さんはゆつくりとうなずいた。

注1 常盤さん——「ぼく」のアルバイト仲間。

注2 まかない——従業員が食べるために用意された料理。

瀬尾まいこ『掬えば手には』

問五 部④について、「ぼく」は、「おばあさん」が「大竹さん」を忘れた理由を、どのようなことだと考えていますか、三〇字以内で説明しなさい。

問六 次にかけろるのは、「大竹さん」の人物像について、授業中に話し合った会話の内容です。児童たちが出した意見として、適当でないものを、次から選び、記号で答えなさい。

ア 児童A―店では言葉が乱暴で、取っつきにくい感じがするけれど、店を離れると、少しだけ話しやすくなるよね。

イ 児童B―料理を覚えて店を持てるようになったことはもちろん、店をきれいにしたりして、相当な努力をしているよ。

ウ 児童C―そうだよな。だから「ぼく」だけではなく、「常盤さん」もその仕事ぶりに尊敬の念を抱いているね。

エ 児童D―従業員に食べてもらうまかないに微妙な味の変化をつけるなど、世話好きで優しい一面があることも読み取れたよ。

部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

- ① しばらくは安静にして過ごす。
- ② はた織りの音が一定のリズムで聞こえる。
- ③ 運動によって基礎代謝を上げていく。
- ④ 早起きして初日の出を拝んだ。
- ⑤ 夏休みを存分に楽しんだ。
- ⑥ 賛成の人はキョシュをお願いします。
- ⑦ そろそろ目をサませ。
- ⑧ 野生動物のセイタイを調べている。
- ⑨ ドウソウ会で旧友に再会した。
- ⑩ タリキホンガンな考えを改める。